



列島囲碁景色

棋禅一字の 世界 実現

リポーター

山下千文さん

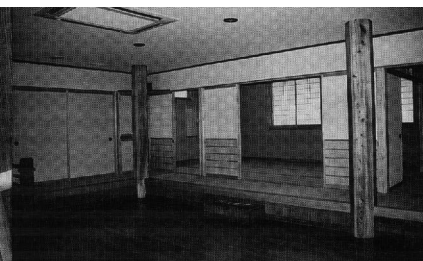


仰天お和尚さん

日本各地に名所と言われる所はいろいろありますが、今回ご紹介するのは囲碁の世界ならではの名所です。ここ栃木県佐野市にある臨済宗建長寺派法雲禅寺の本堂に一步足を踏み入れ天井を見上げると、そこには碁盤がありました。

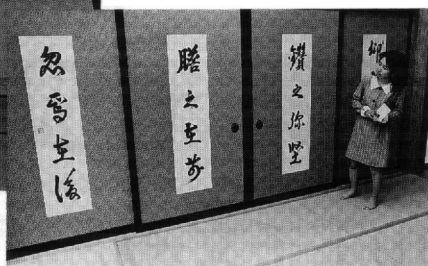
この「凡人」では思いもつかないアイデアの持ち主こそ、住職の鷲見一道さんです。





座禅と碁会にぴったりの本堂道場。

来たれ、 清楽の 空間へ



襖の問いかけ。「之」の意味が分って開けることが許される？ 左が総代の細谷さん、檀家の説得に尽力。

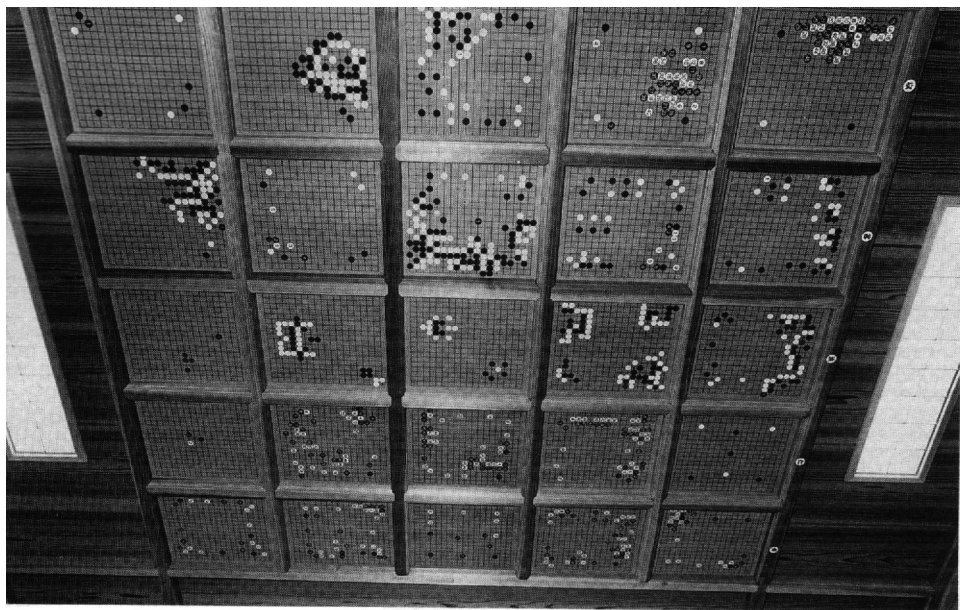
「佐野にお住まいの、あるご夫婦の家に樹齢二百年余という樫の木があったのですが、ある時切らねばならなくなりました。ご夫婦は泣く泣く切る決心をしましたが、何とか有意義に使えないか、と考えました。ちょうどその頃、本堂を新築しており天井の木が足りない、という話もちあがりしました。そこで、この樫の木を天井に使えないか、折角だから碁盤にして名局を並べて天井に上げよう、と思いました」

ことの発端は、こんないきさつからでした。

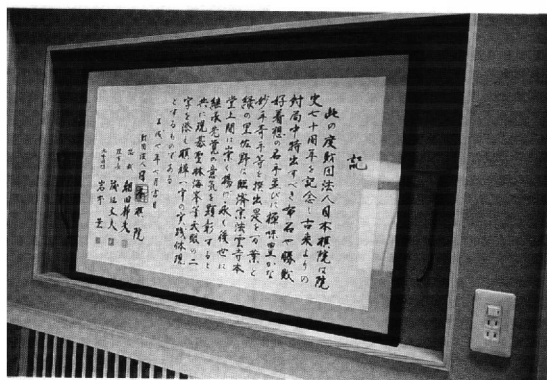
檀家総代の細谷さんの強力な後押しもあって、早速加納嘉徳九段、水口藤雄さん（コミュニティハウス津久井湖囲碁資料室長）の協力を得て古今の名局、古典の傑作詰碁二五局を選びました。それを本堂上間の間（本堂で一番格のある部屋）の天井に上げて「天眼の間」としました。

それにしても、普段見下ろしている碁盤が天井にある、というのは何

全部解けたらあなたは囲碁博士。各々樞一寸盤で取り外しができる念の入りよう。三列目左は奇抜な黒の初手を集めた。



列島囲碁景色



林海峰九段の揮毫「天眼」。囲碁の空間をひきしめ、意味深長。

とも不思議な感じを受けました。

顧師言・高岳親王との鎮神頭之一手から始まり、かの有名な、一八四六年安田秀策の、耳赤の一手、現在では、一九九三年、林海峰九段・小松英樹九段、長生無勝負と、囲碁愛好家なら、一度は目にしたことのある名局、名詰碁の宝庫を仰ぎ見て思わず息をのんでしまいました。

「こゝ、法雲寺は、囲碁と禅が一つになつています。禅の心と囲碁は似ているところがあります。禅と碁で交流をし、日本棋院と寺でフキヨウ(?)に努めたいと思います」と驚見住職。まさに「棋禅一字」の誕生です。その「棋禅一字」の実践の場として、全国の囲碁ファンの来訪と、院生の合宿の場にと、住職の夢はふくらみます。

「万葉の里」と呼ばれる佐野の地で、星空ならぬ、碁盤を見上げて眠りにつき、名局の夢を見る、翌朝目覚めた時には、一目も二目も強くなっている……そんな願いを胸に、また訪ねてみたいと思いました。